

特集 「災害」に寄せて

小山 哲

二〇一一年三月一日午後二時四六分、東北地方の太平洋沖で、日本での観測史上最大級の地震が発生した。地震の規模を示すマグニチュードは九・〇、最大震度は宮城県栗原市で七を記録し、震度六以上を観測した地域は東北から関東にかけての八県に及んだ。この地震によって大規模な津波が発生し、とくに岩手、宮城、福島 of 三県の太平洋岸の地域に甚大な被害をもたらした。余震による被害も含めると、地震と津波による死者は一五八七九人、行方不明者二七二人、建築物の損壊は全壊・半壊を合わせて三九万戸以上にのぼる（二〇一二年二月二六日現在）。

「東日本大震災」と呼称されることになったこの震災は、その規模が大きく、被災地が広範囲に及んだだけでなく、福島第一原子力発電所の重大な事故（レベル七）を引き起こした点で、過去に起こった震災とは次元の異なる深刻な問題を投げかけることになった。この事故にもなつて大量の放射性物質が放出され、広い範囲にわたつて海と大地が汚染された。事故を起こした原発の周辺地域は立ち入りが制限され、住民は住み慣れた土地を離れて避難することを余儀なくされた。破損した原子炉の処理には膨大な経費と労力と時間が必要であり、汚染度の高い地域に住民が戻ることは今後も長きにわたつて不可能であろう。事故の処理と避難生活は現在なお進行中であり、その意味では「震災」はまだ終わっていない。

東日本大震災をとおして、わたしたちは、周期的に大規模な自然災害にさらされることを運命づけられた列島で暮らしていることを、あらためて痛切に思い知らされた。そして、福島第一原発の事故は、必ずめぐってくる災害にもなうリスクを直視せず、「安全神話」や補助金と引き換えに過疎地に危険な施設を押しつけることによって原子力政策を押し進

めてきた日本の政・財界、学界、メディア、地域社会の構造的な問題点をも浮かび上がらせたのである。

史学研究会では、二〇〇六年より、毎年四月の例会で共通テーマのもとに各分野から研究成果を発表していただき、さらに、例会での報告と議論をふまえて特集号を編集・刊行してきた。本特集号のもとになっている二〇一二年四月の例会の準備は、その前年の夏から秋にかけて、東日本大震災の深刻な影響が身近に感じられるなかで始められた。常務理事会で企画を検討するなかで、「災害」を例会の共通テーマにすることは、ごく自然な流れで決まったように思う。もちろん、歴史学のような分野で議論するにはまだ生々しすぎるのではないか、という懸念の声はあったし、それぞれの分野でふさわしい報告者を見つけることができるだろうか、という不安もあった。しかし、考古学、東洋史、西洋史、現代史、地理学の五分野から発表をお願いしてプログラムを組み、じつさいに例会を開催してみると、震災の現場での調査をふまえた現在進行形の知見と、異なる時代と地域の事例をふまえた歴史的な研究の視点とが相互に照射しあって、史学研究会にふさわしい、充実した内容のシンポジウムとなった。本特集号は、この例会で報告していただいた五名の報告者による論説に、さらに日本史の論説と、考古学・西洋史・現代史・地理学の各分野からの書評・紹介を加えて構成されたものである。東日本大震災の経験からわたしたちが学んだことの一つは、災害について議論するさいに、歴史的な視点が不可欠であるということである。今回の地震と津波をうけて、歴史的な先例としてわかに注目を集めることになったのが、貞観一年（八六九年）に陸奥国で起こった巨大な地震と津波である。本特集号の巻頭に置かれた柳澤論説は、この貞観の大地震と津波について、文献史料からはわからない被災の実態と復興の様相を、考古学的な発掘の成果にもとづいて明らかにしている。古代遺跡の発掘調査をふまえて再現された仙台平野における貞観津波の浸水域（第1図）を見ると、東日本大震災時の浸水域（<http://www.gsi.go.jp/common/000060133.pdf>）と大きく重なっていることに今更ながら驚かされる。多賀城廃寺、陸奥国分寺・国分尼寺の発掘調査から、地震による被害の跡だけでなく、復興の規模や経緯がうかがえることも

貴重な知見であろう。

大きな天変地異に直面したとき、人間の社会は、そこにさまざまな意味づけを与えながら災害に向き合ってきた。近代以降の自然科学による地形や気象の変化の説明が一般化する以前には、宗教的な枠組みが、天地の変動を理解するさいにしばしば重要な役割を担った。山田論説と楠論説は、それぞれ室町時代の日本と一六世紀のイギリスの事例をとりあげて、災害が宗教的な次元でどのように意味づけられ、いかなる実践を生み出したかを具体的に明らかにしている。伊勢神宮とイギリス国教会では世界像はまったく異なるはずだが、災害を「カミ」「神」の意思のあらわれととらえ、そのような理解のうえにたつて災害への社会的対応を発想する点で共通しているのは興味深い。

他方で、遊牧民や漂流民のように移動しながら暮らす人びとは、自然環境の変化に柔軟に対応しながら災害に向き合う独自の文化を育んできた。窪田論説は、自然科学と人文・社会科学の諸分野を統合する「イリプロジェクト」の研究成果をふまえて、一〇〇〇年という長期の時間枠のなかで、中央ユーラシアの人びとが環境変動にどのように適応してきたかを解説している。近代化にともなう遊牧民の集団化・定住化が災害への適応能力を低下させた可能性があり、ソ連の農業政策による社会的な混乱こそは過去一〇〇〇年の最大の災害であったと指摘されている点は、続く梶川論説の内容とも関連する重要な指摘である。災害の内容を区分けして天災と人災の境界線を引くことはしばしば困難であるだけでなく、そのような区分をすること自体がある種の政治性を帯びることもありうる。一九二一／二二年のソ連における飢饉はカニバリズムをとまなう悲惨な状況をもたらしたが、梶川論説によれば、これは、旱魃による被害が中央権力の政策上の誤りによつて著しく拡大したためだという。論者は、ネップ神話によつて隠蔽されてきた「国家的犯罪行為」の内実を克明に描き出している。

論説の最後に置かれた小田論説は、東日本大震災の現場に身を置くことになった地理学者の「体験と実践の記録」である。いわき市を郷里とし、仙台市で九年間を過ごした経験をもつ論者にとって、今回の震災の現場は単なる「調査対象」

ではありえない。しかし同時にそのような個人的な来歴が、地理学者として「被災地」にかかわる原動力となり、「地理的想像力」に導かれながら原発事故の避難者が置かれている状況を調査し、情報を発信する役割を自覚する土壌ともなっていることがわかる。

書評三点と紹介一点は、考古学、歴史学、地理学の分野から、災害や原子力の問題にかかわる国内外の出版物をとりあげている。それぞれ対応するテーマの論説と併せ読んでいただくと、災害と人間社会のかかわりをより立体的にとらえる手がかりが得られるのではないかと思う。

読者のなかには、今回の特集号に、通常の『史林』のスタイルとは異なるものを感じる方もおられるかもしれない。現在進行中の問題を共通テーマとしてとりあげたことから、本特集号の編集にあたっては、従来とは少し異なる基準も念頭において、被災の現場の只中に身を置く研究者の「経過報告」的な論稿をもあえて論説として掲載した。また、「災害」のようなテーマを扱うためには、理系・文系の境界を越えた視点も必要となる。そのため、今回は、狭い意味での「史学」を専門とはされない論者の方にも論稿の執筆をお願いした。本号の編集にかかわりながら、このような企画がなんとか実現にこぎつけたのは、『史林』が諸分野を横断する「総合雑誌」であればこそではないかと感じている。そのような意味で、本特集号を、『史林』という媒体がもっている可能性の拡がりを示すものとして受けとめていただければ幸いである。

（本会常務理事）